## アルバニア語の補文構造 一現代ギリシア語との比較の試み*一*

井浦 伊知郎

0.1113 10 10 10

アルバニア語には、主に3種類の補文標識(不変化詞)がある。

- (1) Kjo tregonte <u>se</u> ky popull ishte
  this show-impf.sg.3 this people-sg.nom.indef be-impf.sg.3
  tashme i aftë për vepra të mëdha.
  current-sg.nom.indef. capable for work-pl.acc.indef. big

  (Kadare 1990:P11)
  「これは、この国民が偉大な業績を成し得る事を示していた」 [se]
- (2)Taqoja e<sup>(1)</sup> kuptoi <u>që</u> ato
  Taqo-nom.def. 3.sg.acc. understand-aor.sg.3 those
  fjalë i drejtoheshin atij.
  word-pl.nom.indef. 3.sg.dat. direct-med.impf.pl.3 3.sg.dat.
  (Meçaj 1975:P79)
  「タチョは、それらの言葉が自分に向けられている事に気付いた」 [që]
- (3)Nuk dua <u>të</u> tronditem.

  not like-sg.l shock-med.conj.sg.l (Meçaj 1975:P112)
  「私は驚かされる<u>のは</u>好きじゃない」 [të]

一方、現代ギリシア語でも3種類の主たる補文標識 $\delta au \iota$ , v lpha,  $\pi o \upsilon v$  知られている(2)。

(4) Ξέρω ότι είσαι ψεύτης.

「私は、君が嘘つきだと知っている」

[ 671]

(5)Τον είδα που ερχόταν.

「私は、彼が来るのを見た」

[που]

(6)θέλω να Φύγω.

「私は行きたい」

[val

両言語の補文標識の使い分けには、どの様な相違(或いは共通)事項が見 られるのだろうか。筆者はアルバニア語の文学作品(Kadare 1990. Mecai 1975) をテクストとして、補文構造を含む文例を取り出し、述語動詞との関 連で整理してみた。その結果幾つかの傾向が見出されたので、以下にまとめ ておく。

## 1. të構文と να構文の類似

të+接続法を取る主文の述語動詞を、Noonan(1985:P110ff)による意味論 的分類(3)に従って列挙すると次の様になる。これは、橘(1992:P78)によっ て示されたvaを取る述語動詞のリストと、よく対応する(括弧内は対応する 現代ギリシア語の動詞)。

## 願望の動詞 (desiderative):

dua(θέλω)「欲する、~したい」 dëshiroj(προτιμώ)「好む」

使役動詞 (causative):

lë(αΦήνω)「~させておく」

urdhëroj(διατάζω)「命令する」

相動詞 (aspectual):

filloj, nis(apx(で)「始める」

vazhdoj(συνεχίζω)「続ける」

法動詞 (modal):

(7)Ergysi filloi shpjegonte

Ergys-nom.def. begin-aor.sg.3 3.sg.dat. explain-impf.sg.3

situatën Artanit.

situation-sg.acc.def. Artan-dat.def.

(Mecai 1975:P9)

「エルギュスはアルタンに状況を説明し始めた」

(8) Αρχισε να γράφει.

「彼は書き始めた」

2.知覚動詞+se

橘(1992: P84)によれば、現代ギリシア語の知覚動詞には補文標識の意味 論的使い分けが見られるという。即ち 「6τιは知的認識内容を示す点で他の 二つと異なり、ναは動的で特定の状況を表す点で他の二つと異なり、πουはす でに前提されている補文内容を導入する点で他の二つと異なっている」。

(9) Ακούω πως (ότι) θα πας στο εξωτερικό.

「私は、君が外国へ行くだろうと聞いている(知的認識内容)」

(10) Τον άκουσα που το είπε.

「私は、彼がそう言うのを聞いた(前提された内容)」

(11)Τον άκουσα να γελάει.

「私は、彼が笑うのを聞いた(具体的・特定化された内容)」

これを踏まえてアルバニア語のse, që, tëと知覚動詞との関係を調べた所、shoh「見る」, dëgjoj「聞く」, ndiej「感じる」 等の知覚動詞は全てseのみを取り、qëや tëを伴う文例は得られなかった。

(12)Shoferi <u>pa</u> <u>se</u> në dhomë, përveç driver-sg.nom.def. see-aor.sg.3 in room-sg.acc.indef. beside portreteve të tjera... dhe ai i Xherxhinskit. portrait-pl.abl.indef. other and that Dzerzhinsky-gen.def.

「運転手は、室内に他の肖像画と並んでジェルジンスキィのそれ (肖像画) があるのを見た」

(13)Ai e<sup>(1)</sup> <u>ndjeu</u> <u>se</u> shkruante... për gjithë He 3.sg.acc. feel-aor.sg.3 write-impf.sg.3 for all popujt e botës.

people-pl.acc.def. world-sg.gen.def.

(Kadare 1990:P61)

「彼は(自分が)世の人全ての為に書いていると感じた」

Buchholz (1987:P513ff) は、文章語やアルバニア南部方言(Tosk方言)では文例 (14)の様な「知覚動詞+të」の様文も見られる場合があると述べているが、資料テクスト中には全く見られなかった。アルバニア語の知覚動詞では、少なくとも現代ギリシア語と同じ様な、状況の具体性・補文内容の前提の有無による補文標識の使い分けはないものと思われる。

(14) <u>Kam dëgjuar</u> nënën <u>të</u> flasë kështu.

hear-pf.sg.1 mother-sg.acc.def. speak-conj.sg.3 so

(Buchholz 1987:P513)

「私は、母がそう話すのを聞いた」

3.që·その他

qëに関する事例は些か複雑で、seやtëを取る述語動詞が、同時にqëを取り得る場合が多い。Buchholz (1987:P513ff) によれば、them「言う」,shkru-aj「書く」,shpjegoj「説明する」等の動詞について、「~する様に」という「要求・依頼」の意味が含まれる文では文例 (16)の様にqëが用いられるという。

(15)A mund të <u>themi</u> <u>se</u> gjithë ky

(interrogative) can-sg.3 say-conj.pl.1 all this

art gjenial... kanë shkuar dëm?

art-sg.nom.indef. genial go-pf.pl.3 waste-sg.acc.indef.

(Kadare 1990:P81)

「この独創的芸術の全てが駄目になったと<u>言え</u>るだろうか?」

(16)Unë <u>them</u> <u>që</u> ju të punoni më mirë.

1.sg.nom. say-sg.1 2.pl.nom. work-conj.pl.2 more good.

(Buchholz 1987:P514)

「私は、君達がより良く働く様にと言う」

だが、その様な条件と全く無関係に見える文例でも、qëは比較的自由に使われている。

(17)Shoferi i <u>tha</u> <u>që</u> njeriun

driver-sg.nom.def. 3.sg.dat. say-aor.sg.3 man-sg.acc.def.

me motor nuk e njihte.

with motorcycle-sg.acc.indef. not 3.sg.acc. know-impf.sg.3

(Megaj 1975:P16)

「運転手は彼に、バイクに乗った男の事は知らないと言った」

また次の様に、同一文脈内で一見何の区別も無くseと qëが用いられる例もある。

(18) Ne nuk e<sup>(2)</sup> <u>dimë</u> <u>se</u> me ç'

1.pl.nom. not 3.sg.acc. know-pl.1 with what

njerëzim tjetër do ta zëvendësonte

humanity-sg.acc.indef. another will 3.sg.acc. replace-impf.sg.3

eusi njerëzimin. <u>Dimë</u> vetëm <u>që</u> ai

Zeus-nom.def. humanity-sg.acc.def. know-pl.1 just that

do të ishte një njerëzim më i keq.

will be-conj.impf.sg.3 one humanity-sg.nom.indef. more bad

(Kadare 1990:P74)

「ゼウスが (この) 人類を他のどんな人類と替えるつもりな<u>のかわから</u>ないが、それ (人類) がもっとひどい人類になろうという事だけはわかる」

これらの例は、発話の述語動詞 (utterance predicate) (Noonan 1985: P110-113) が主に ότιを取る現代ギリシア語の場合とは異なっている。

(19)Μου <u>είπε</u> ότι έβρεχε.

「彼は私に、雨が降っていると言った」

以上で見る限り、アルバニア語では主文の述語動詞に対する補文標識の選択が(現代ギリシア語に比べて)より随意に行われている様だが、seと qëの使い分けについては、なお何らかの意味的差異が見い出せる様に思われる。

- (1) この目的語人称代名詞 eは、後の補文節を指し示す。アルバニア語に於ける代名詞の重複現象については Buchholz (1987) 他参照。
- (2)現代ギリシア語の文例は、辞書類より適宜引用した。
- (3)統語論的考察については、Noonan(1985:P68ff)参照。補文主語の「繰り上げ (raising)」に関し若干の記述がある。
- (4)アルバニア語の法動詞と të+接続法の歴史的文法については Demiraj (1985: P868)参照。
- (5) seと qëの語源学的考察については Mann(1977:P122)参照。

## 参考文献

- Buchholz, Oda & Fiedler, Wilfried (1987); Albanische Grammatik (Leipzig, VEB Verlag Enzyklopädie)
- Demiraj, Shaban (1985); Gramatikë historike e gjuhës shqipe (Tiranë, Shtëpia Botuese "8 Nëntori")
- Kadare, Ismail (1990); Eskili. Ky humbës i madh (Tiranë, Shtëpia Botuese "8 Nëntori")
- Mann, Stuart E. (1977); An Albanian historical grammar (Hamburg, Helmut Buske Verlag)
- Meçaj,Vladimir(1975);*I panjohuri i Rinasit*(Tiranë, Shtëpia Botuese "Naim Frashëri")
- Noonan, Michael (1985); "Complementation" in: Language typology and syntactic description Vol.2 (T. Chopen, ed.), 42-140 (Cambridge, Cambridge Univ. Press)
- 橘孝司 (1992);「現代ギリシア語の補文標識について一知覚動詞構文を中心 として一」『ニダバ』 21,77-86